

# 徒然草における教養美の考察

——文選を主として——

中 田 正 心

## は じ め に

『徒然草』の作者兼好は、出家者・沙弥として現世に不即不離の交渉を持ちながら、傍観者ゆえの鋭い眼をもって、弾力的な論理を展開しながら、

ありたき事は、まことしき文の道，作文，和歌，管絃の道，又有職に公事の方，人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。

(第1段)

といい、また

何事も、古き世のみぞ慕はしき。今様はむげに賤しくこそなりゆくめれ。

(中略)

文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。ただ言ふ言葉も口惜しうこそなりもてゆくなれ。(後略)

(第22段)

という。この兩段から感得するのは、平安朝の薰りである。

貴族文学である和歌の二条派歌人の四天王の一人として、王朝の系譜に連なる面から尚古主義・王朝趣味者の名をほしいままにしている。

「古き世のみぞ慕はし」く、定家自筆の『源氏物語』を為定から借りて書写したのは、延元元年であり、それから5年後に桐壺巻を校合している<sup>(1)</sup>。これは歌人としての当然の教養であると言えよう。

### 徒然草における教養美の考察

また『徒然草』も王朝文学において『源氏物語』と双璧である『枕草子』を、同ジャンルの先行文学として意識し、範として綴られたことは言うまでもない。『枕草子』の「書は文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文」(200段)に対して、

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏の文集、老子のこことば、南華の篇。此の国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事多かり。

(第13段)

と、伝統的な朝紳の教養としての漢籍をあげている。兼好はこれら漢詩文に長じていたことは、「九の巻の其所其所の程に侍る」(第238段)と、『論語』の巻を20代で言い当てていることにもいえよう。

兼好の言う「此の国の博士どもの書ける物」とは、『文選』を模範としてなった、我が日本漢文学の頂点ともいえる『本朝文粹<sup>(2)</sup>』である。早く『文選』は「十七条憲法」にも影響して「五日(前略)便有財之訟、如石投水。乏者之訴、似水投石。(後略)」などは、巻27李蕭遠の「運命論」に見られる。すなわち、

其言也如以水投石。莫之受也。及其遭漢祖、也其言也如以石投水。莫之逆也。「養老令」には「凡進士試時務策二条、帖所讀文選上袂七帖・爾雅三帖」と進士試験に、すでに『文選』が課せられている。平安朝に入って『文選』はいよいよ盛んに行われ、延暦17年太政官では大学生の16歳以下の史学者が学習することになり、又多くの文章博士が進講している。『文選』『白氏文集』から滋養を受けて、王朝の漢文学は嵯峨朝の形成時代、貞観・延喜の黄金時代となる。

時移り、その流行が大いに衰えた兼好の時代に、王朝趣味を自称する彼が、どの程度『文選』の「あはれなる巻々」を『徒然草』の上に投影させていったのか、ということに関心を持つ。なぜならば、作者には意識的なものと無意識的なものとに拘らず、これに創作の地盤があり、これを探ぐることは、兼好の物の見方を掌握する方法の助奏になると考えるからである。今、富倉博士の分類<sup>(3)</sup>をお

借りして、(1)無常観 (2)趣味観について考察していく。

## (1) 無 常 観

『徒然草』における無常観は、人間主義的な基盤を踏まえつつ同時に仏者的であり、あるいは逆に仏者的な基盤に立ちつつ同時に人間主義的である<sup>(4)</sup>。そういう両者の混淆の立場で死が我れに迫っていることを認識し、そうして人生すべてはこの認識から出発しなければならないと説くのである。

以下段を追って『文選』が投影された点について指摘していく。

静かに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき。

人静まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残しおかじと思ふ反古など破りすすつの中に、なき人の手習ひ、絵書きすさびたる、見出でたるこそ、ただ其の折の心ちすれ。此の頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手馴れし具足なども、心も無くて変らず久しき、いとかなし。 (第29段)

この段は、第12段の「同じ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなく言ひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆたかはざらんと対ひるたらんは、独りある心ちやせん」と真の友は得がたいことを嘆き、次の第13段において、過去の人への思慕に移るという友情に関して叙述している点において共通するものがある。

あくまで孤独の寂寥というだけではなく、「よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせんかたなき」の冒頭部が言うように、世の無常の感情のあらわれがある。夜長の慰みに「残しおかじと思ふ反古など破りすすつの中に、なき人の手習ひ、絵書きすさびたる」を見出ししては、今は亡き人との事々が、走馬燈の如く懐想される。

この箇所は、『文選』巻28潘安仁の「楊仲武誄並序」に拠っている。

徳宮之艱

同次外寝

徒然草における教養美の考察

惟 我 与 爾  
对 筵 接 枕  
自 時 迄 今  
曾 未 盈 稔  
姑 姪 繼 隕  
何 痛 斯 甚  
嗚 呼 哀 哉  
披 帙 散 書  
屢 覩 遺 文  
有 造 有 写  
或 草 或 真  
執 玩 周 復  
想 見 其 人  
紙 勞 干 手  
涕 霑 干 巾

この文章は、潘安仁が妻の喪に服して1年も経たぬうちに、一緒に服していた3世の間世親の楊仲武も、春秋20歳の短命にして没してしまったのに対する誄である。それほど長文ではないが、5箇所において「嗚呼哀哉」また「嗚呼仲武、痛哉奈何」と、悲痛の限りを尽くしている。憂いに沈み、帙を披いて遺文を見ると、草、楷書の妙味に亡き人を追想しては涙にくれるのである。

今、独り小野の山里に遁世生活をする兼好にとって、思い出される過去は恋しく哀傷をそそり、30代の若々しい情緒的、心情的なものを流露している姿は、内向的に噛み締める絶望的な孤独感、人生の無常への感慨である。そこには『枕草子』の言う「過ぎにしかた恋しきもの枯れたる葵。ひひな遊びの調度。二藍。葡萄染などのさいでのおしへされて冊子の中などにありける、見つけたる。また、をりからあはれなりし人の文、雨など降り、つれづれなる日探し出でたる。去年のかはほり」（28段）の羅列とは異なる、自照性を観るのである。

徒然草における教養美の考察

また、「手馴れし具足」は単に「故人が日常使い馴れていた道具類」ではなく、井手恒雄氏のいうように<sup>(6)</sup>「少くとも『女性』のものでなければならないであろう。それは恋しい女性なのである。

潘安仁は卷12の「悼亡詩」3首の1首目に、妻を葬ってから、かなりの時経てもかたみの品々を見てはいよいよつゆく悲しみを歌う。

荏苒冬春謝  
寒暑忽流易  
之子歸窮泉  
重壤永幽隔  
私懷誰克從  
淹留亦何益  
僮俛恭朝命  
廻心反初役  
望廬思其人  
入室想所歷  
帷屏無髣髴  
翰墨有餘跡  
流芳未及歇  
遺挂猶在壁  
悵恍如或存  
周遑忡驚惕  
如彼翰林鳥  
雙栖一朝隻  
如彼遊川魚  
比目中路析  
春風緣隙來  
晨霽檐承滴

徒然草における教養美の考察

寝興何時忘  
沈憂日盈積  
庶幾有時衰  
莊缶猶可擊

この詩は、この第29段から第30段に至る構成、叙述の上に十分に投影されているのではないかとも思える。

第29段を受けて、故人への追憶から連想に及ぶのが第30段である。

「人の亡きあとばかり悲しきはなし。」と、前段の余韻をもちつつ、人の死後、そのなごりがうたかたの如く儚なく消滅していく哀感を総括的に言った後、「中陰のほど……略」における第1節は「亡き人」について家族や近親者が印象をなつかしく語るものであるけれども、時の速やかさとともに、中陰の終ろうとする頃から利己心が現われてくる。兼好はたまりかねて「かばかりのなかに、何かははと、人の心はなほうたて覚ゆれ」と、避けられぬ死を凝視している。この節で兼好の筆は生々しいまでに躍動しているといえるのではないだろうか。しかし、第2節になって

年月へても、つゆ忘るるにはあらねど、「去る者は日々に疎し」といへることなれば、さはいへど、其のきはばかりは覚えぬにや、よしなしごと言ひてうちも笑ひぬ。（後略）

ここでは、『文選』巻29「古詩十九首十四」の

去者日以疎  
來者日以親  
出郭門直視  
但見丘与墳  
古墓犂為田  
松柏摧為薪  
白楊多悲風  
蕭蕭愁殺人

徒然草における教養美の考察

思 還 故 里 間

欲 帰 道 無 因

に依存していることも歴然としている。

墓石を造り、命日、周忌の回向が単なる儀礼にならざるを得ない現実を描く。それはもはや人為の世界ではなく、木の葉であり、夕の風であり、寒々とした歌々たる月光の世界であった。

第3節にいたたまれず「思ひ出でてしのぶ人あらんほどこそあらめ」と言うものの、「跡問ふわざも絶えぬれば」となる運命を感じた時、彼の筆の運びはにぶつたとみていいだろう。「いつれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを」は『白氏文集』巻2「続古詩十首」第2、掩涙別郷里、飄飄將遠行。茫茫緑野中、春尽孤客情。驅馬上丘隴、高低路不平。風吹棠梨花、啼鳥時一声。古墓何代人、不知姓与名。化作路傍土、年年春草生。感彼忽自悟、今我何嘗嘗。を引用し、

はては嵐にむせびし松も千年をまたで薪にくだかれ、古き墳はずかれて田となりぬ。そのかただになくなりぬるぞ悲しき。

は「古詩十九首」前詩の五、六、七、八句に拠っていることは明らかである。

兼好は第2節から大きな嘆息に覆われて創作が出来ず、これ程までに準拠しなければならなかったのであろう。どうしようもない動揺から、文調が消え薄れてゆくところを漢文訓読調にして最後までたどりつけたといえよう。吉川秀雄は「人の死後の悲しさを述べたものであるが、悟りきった僧侶の悟りではなく、涙もろい詩人の言葉であるのが、うれしい<sup>(6)</sup>」といている。

人間の存在が時の経過の中で、うたかたの如くあらわれては消えてゆくことに傷み悲しむ姿をとらえて、この段を境とし成立年代を考証することも行なわれている<sup>(7)</sup>。

それほどまでにこの段は後の段と異なり、人生の無常、万物流転を唯々詠嘆するのみなのだ。

哀悲詠嘆のテーマともなる部分に『文選』を用いたことについて、「古詩十九

## 徒然草における教養美の考察

首」の、兼好の読みの深さに驚嘆する。

古詩にみられる無常観というものは、天地との対比において人生のはかなさを切実なものにしていて、まだ観念の深まりは見られない。古詩は民間詩・民衆詩であるから、生活的であり、具体的なものである。その生活の感情の悲哀感をもつことから、それにつらなることばが挿入された<sup>(8)</sup>と見るべきである。また、彼等の感情・世界であってみれば、背景について語る必要はなかったわけで、今日これを明らかにすることは不可能である。

「古詩十九首十四」は異郷にあって古墓を過ぎ、帰郷を思う詩<sup>(9)</sup>とするならば、一時も止まることのない万物流転の中での、あまりにもはかなく微量な人間の営みをも一つの旅と覚えた兼好であったろう。

第30段における無常観に対する感傷とは異なって、第74段になると、『徒然草』の第2部と言われるように悟道的な冷静さをそこにみる。

蟻の如くに集まりて、東西に急ぎ南北にわしる。高きあり賤しきあり。老いたるあり若きあり。行く所あり帰る家あり。夕にいねて朝におく。営む所何事ぞや。生を貪り、利を求めてやむ時なし。

冒頭の部分は『文選』巻9馬季長の「長笛賦並序」の

簫管備举金石竝隆，倫奪相，以宣八風，律呂既和哀声五降，曲終闕尽，餘絃更興，繁手累發，密櫛疊重，踳蹶攢仄，蜂聚蟻同，衆音狼積以厥終送。

によっている。兼好はその一部分を冒頭に引用したにすぎない<sup>(10)</sup>。ただ、『徒然草』中でも有数の漢文訓読調の段とした点からみると、その役割は大といえる。

人生を高い所から冷静に観察した後で、「期する所、ただ老と死とにあり、其の来る事速にして、念々の間にとどまらず」と言い、緊迫した声調を形成しているのは、やはり文の調べにおいてであろう。

第74段の無常観をさらに哲学的に述べるものとして、第93段がある。

第1節においては、牛の売買の契約をしたが、売渡される前夜、突然牛が死んだという話をもちだして「売り手に損がある」という。それを聞いた「かたへなる者」（勿論兼好自身であることは自明）が、第2節において「死の恐れ」を前



### 徒然草における教養美の考察

提として、「生の楽しみ」「存命のよろこび」を底にする「生を愛すべし」という。そして最後に「生死の相にあづからずといはば、実の理を得たりといふべし」と、一段高い境地を言うのである。

是を聞きて、かたへなる者のいはく、「牛のぬし誠に損ありといへども、又大きな利あり。其の故は、生あるもの、死の近き事を知らざる事、牛既に然なり。人又同じ。測らざるに牛は死し、測らざるに主は存ぜり。一日の命万金よりも重し。牛の価鵝毛よりも軽し。万金を得て一銭を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、其の理は牛の主に限るべからずといふ。

この中の「牛の価鵝毛よりも軽し」は、『文選』巻21司馬子長「報任少卿書」の人固有一死。死或重於太山、或輕於鴻毛。用之所趣異也。

に依るであろう。またこれより少しく前に「假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛。与螻蟻何以異。」とある。

李陵を弁護して、言禍により宮刑をうけ宦官になってまで、帝の側近として生きながらえていかなければならぬ司馬子長を、兼好は武帝の前の「牛」の存在と理解したのであろう。もう暫くこの書簡について言を弄するならば、人間の歴史の古今にわたる変遷を見極めて、彼自身の著述を完成しようとしたが、途中で刑罰を受ける禍いになってみれば、痛惜このうえない。悲願達成まではと、心から最も恥すべき官刑に平然と臨んだのであった。この気持は知識人には納得してもらえるが、俗人には馬の耳に念仏であるかもしれぬ。

亦欲以究天人之祭通古今之變、成一家之言。草創未就会遭此禍。惜其不成。是以就極刑而無愠色。僕誠已著此書、藏之名山、伝之其人通邑大都、則僕償前辱之責、雖万被戮豈有悔哉。然此可為智者道。難為俗人言也。

かくして、『史記』130巻は獄中での執筆期間を合せて凡そ太始4年紀元前93年司馬子長53歳の時、15年の歳月を費して完成したのであった。

『史記』が我が『源氏物語』は言うまでもなく、平安朝の文学に多大な影響を与えていることを思えば、兼好は「報任少卿書」を十分に承知していただろうと

想像する。

「要するにどんな目的のために死ぬかが問題である。」ということが、兼好の主題でもある。生死が人間の大きな課題だとすれば、当然その実相を美しきものと理解し、賞讃するのである。兼好の無常の認識があくまで積極的、悟道的なものであってみれば、刑罰のうち最も恥ずべき宮刑を乞うてまで、人間世界のドラマを創作しようとした司馬子長の姿は、兼好の共鳴するところであったし、先人の美しい姿をそこにみたといえるであろう。

人間ならざる人間、生、死を超越したいわば「生死の相にあづからず」の事実を、兼好はまざまざとみせつけられたのである。

## (2) 趣 味 観

変革期に行立する兼好は、「万物は皆非なり」と自分に言いきかせつつ、目紛らしい内乱の時を超越している。彼のそうした奥深い道理から滲み出る趣味観は、感情的な関心というよりは、事物を理知的に判断するところにある。その多くは平安朝以来の貴紳道の流れに立つ趣味に浸潤する知的趣味観<sup>(11)</sup>であり、中世的な変易といえるものである。

### (イ)自然について

自然に対しての描写は自然鑑賞の方法という、余情的な美を尊ぶそれであるが、兼好の場合には万物流転の思想を裏づけとすることによって、一種の悟道的な自然の見方として説かれている<sup>(12)</sup>ところに、特殊性がある。

(前略) 月花はさらなり。風のみこそ人に心はつくめれ。岩に砕けて清く流る水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅湘日夜東に流れ去る。愁人の為にとどまること少時もせず」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。替康も、「山沢に遊びて、魚鳥を見れば心楽しぶ」といへり。人遠く、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰む事はあらじ。

(第21段)

『徒然草』に、自然を述べた箇所は極めて少なく、六段をあげる<sup>(13)</sup>のみであ

る。

月や、花や、風の興趣をいいながらも、戴叔倫の「湘南即事」の「盧橘花開楓葉衰，出門何処望京師。沅湘日夜東流去，不為愁人住少時」の三四句を訓読のまま引用している。末文は『文選』巻22嵇康の「与山巨源絶交書」に依る。

山巨源が大司馬に転任する為に、いままで在任していた選曹郎の地位を嵇康に代われせようと思ったのに対して、官途に就かず、自適の生活に満足しているとして絶交書をつきつけた。

遊山沢，觀魚鳥，心甚樂之。一行作吏，此事便癢。安能舍其所樂。而從其所懼哉。

これより前に「老子莊周吾之師也。親居賤職。柳下惠・東方朔達人也。安乎卑位。（中略）少加孤露，母兄見驕，不涉經学。性復疎嬾筋筋驚肉緩。頭面常一月十五日不洗。不大悶癢不能沐也。每常小便而忍不起。今胸中略轉乃起耳。又縱逸來久。情意傲散，簡与礼相背，嬾与慢相成。而為儕類見寬，不攻其過。又讀莊老，重增其放。故使榮進之心日蠶，任爽之情轉篤。此由禽鹿少見馴育，則服從教制，長而見羈，則狂顧頓縷赴蹈湯火。雖飾以金鑣饗以嘉肴愈思長林而志在豐草也。」

老莊，柳下惠，東方朔は皆賤職に居った。少年時代より放任で育ち，儒学を学ばず，礼儀を身につけず，老莊の書を読んで放縱が増したので，仕官の気持は消滅して隠遁したことと思うという。

嵇康は，阮籍とならんで竹林の七賢の一人で，老莊思想がきわめて濃厚であってみれば，兼好の好むところであつたらう。第19段のように世俗的，生活的な興趣ではなくして，俗塵を脱し，閑寂な自然美ともいえる月や，露や，花や，風や，水や，山沢や草は嵇康の書の主旨と同じうする風韻があり，遁世生活をしている兼好の自然観の支えになっている。

#### (ロ)恋愛について

兼好の恋愛観が，平安朝以来の貴紳の恋愛観を基調としていることは，その自然観と同じである。「色好む」という語の方が適切である。これは平安朝時代以来の貴族社会の言葉であった。

徒然草における教養美の考察

よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の杯の底なきこちぞすべき。(後略)

(第3段)

を見ると、「玉の杯の底なき心地」は『徒然草』のさわりの1句として古来もてはやされているが、本来平安時代の文学精神であって、色好まぬ男の比喩として、人間の本質や人情の自然を欠く状況を、それこそ小気味よく言いあてている。

この箇所について橘純一氏は「班固の三都賦序の詞をとった<sup>(14)</sup>」というけれども、誤植であって、『文選』巻2の左太冲「三都賦序」でなければならない。

且夫玉卮無当，雖宝非用。侈言無驗，雖麗非經。

「当」はもともと底の意を持つ一般的な用法である。

作者左太冲は、書法や琴を鼓することを学んだが成らず、のち父のはげましに発憤して学をよくしていった。容貌はみにくく、口は重く、交遊を好まず、ただ間居をするだけであった<sup>(15)</sup>という。

漢賦が机上の空想の所産であるのに対して、左太冲は事実存在する事物を列挙しようという写真精神の下に、10年の歳月を要して、「蜀都賦」「吳都賦」「魏都賦」を完成すると、貴族は競って伝写し、洛陽の紙価を高めた。

平安前期における漢詩文の黄金期には、この「三都賦序」を誦誦したものもあったというからして、兼好にとっては日常的な語句ではなかつただろうか。但し、左太冲はまさかこのような文意に用いられようとは、想像もしなかつたであろう。兼好は遁世した身ながら、俗世の世界に対する関心を強く押し出しているところをみると、案外左太冲について知ったうえでのユーモアではなかつたか。というのは、「あふさぎるさに思ひみだれ、さるは、独寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ」は『文選』巻12阮嗣宗「詠懐十七首」第一首

夜中不能寐  
起坐彈鳴琴  
薄帷鑑明月

徒然草における教養美の考察

清風吹我衿  
孤鴻号外舒  
翔鳥鳴北林  
徘徊将何見  
憂思独傷心

を指摘されなくもないからである。

竹林の七賢の首領格である阮嗣宗ともあろう人が夜中になっても寝られず、不安な心情にかられることもない。この詩が型的に投影されているのではなからうか。左太冲・阮嗣宗の詩賦を根幹とする恋愛談に、粹法師兼好の北叟笑みがある。因に「北森」は後宮に近い林である。

本稿は今回ここにとどめ、後日他の段について試論したい。

(注)

本文引用に使用した書典は、下記の通り。

橘純一『徒然草』（日本古典全書）

田中重太郎『枕草子』（日本古典全書）

岡田正之・佐久節『文選』（国訳漢文大成）

- (1) 福田秀一『国文学』「歌人兼好とその周辺」（昭和40年7月）参照。
- (2) 大曾根章介『解釈と鑑賞』「王朝漢文学の諸問題」（昭和38年1月）参照。
- (3) 富倉徳次郎『類纂・評釈徒然草』参照。
- (4) 小林智昭『中世文学の思想』〈無常思想の問題〉参照。
- (5) 『国文学』「徒然草の現代性をさぐる」（昭和44年3月）参照。
- (6) 吉川秀雄『新釈徒然草精解』参照。
- (7) 安良岡康作『徒然草全注釈』下巻解説参照。
- (8) 鈴木修次『漢魏詩の研究』〈第五項漢魏の民間詩歌に示された文学感情の問題〉参照。
- (9) 内田泉之助・網祐次『文選』（新釈漢文大系）15参照。
- (10) 無常が人の世の理であるならば、起伏する人生に対する享楽観が生ずる点で、「古詩十九首第十五」の投影も考えられる。  
生年不滿百，常懷千歲憂。昼短苦夜長，  
何不秉燭遊。為樂當及時，何能待來茲。

徒然草における教養美の考察

愚者愛惜費，伯為後世嗤。仙人王子喬，  
難可与等期。

- ⑪ 富倉徳次郎『前書』〈趣味論者としての言説〉参照。
- ⑫ 富倉徳次郎『前書』〈趣味論者としての言説〉参照。
- ⑬ 富倉徳次郎『前書』〈目次〉参照。
- ⑭ 橘純一『徒然草』第3段頭注（日本古典全書）
- ⑮ 内田泉之助・網祐次『前書』参照。